

Title	ラインホールド・ニーバーとピューリタニズム（共同研究報告：ニーバー研究）
Author(s)	豊川, 慎
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2352
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

共同研究報告

【ニーバー研究】

ラインホルド・ニーバーとピューリタニズム

2009年10月3日（土曜日）、聖学院本部新館2階集会室において「ラインホルド・ニーバー研究センター」発足研究会（出席者33名）が開催された。「ニーバー研究センター」は日本におけるニーバー研究の拠点的な役割を果たすために聖学院総合研究所に新たに設けられたものであり、その発足にあたって聖学院大学大学院教授の高橋義文先生が「ラインホルド・ニーバーとピューリタニズム」と題して記念講演を行った。以下、講演の概要を記す。

高橋氏によれば、R.ニーバー（1892－1971）は一般にルター派神学者と見なされるが、こと政治に関してはニーバー自身、自らの立場が非ルター派であることを言明していた。そしてニーバー思想における「反ルター派」の意味を明らかにするためにニーバーのピューリタニズム解釈に注目し、初期ニーバーのピューリタニズム観から、同時代人であるP. ミラーやW.ハーラーなどのピューリタニズム研究がニーバーのピューリタニズム観の深まりに及ぼした程までを論じていく。そして初期の思想からさらに成熟した思想が展開される1940年代以降のニーバーの主要著作においては「デモクラシーの人間論」、「トレレーション（寛容）の問題」、「アメリカ・デモクラシーの淵源」の三点に関する重要な点でピューリタニズムへの言及がなされていることが指摘される。具体的に言えば、デモクラシーの人間観に関しては、ミルトンの人間論に言及しつつピューリタニズムの人間論がデモクラシーに貢献したその内実が論じられ、トレレーション、特に宗教的寛容の問題に関しては、ニーバーがその源泉を17世紀イギリスのピューリタニズムの歴史の中に見ていることが指摘され、さらには、「アメリカ・デモクラシーの淵源」に関しては、一点目のデモクラシーの人間論とも重複する点ではあるが、ニーバーがルター

の二統治論的政治思想をミルトン解釈によってそれを克服して政治的市民的自由へと発展させ、アメリカのデモクラシーのみならず「近代デモクラシー」の淵源をカルヴィニズムの影響を受けた17世紀イギリス・ピューリタニズムに見出していたことが論じられた。

従来、ニーバーの神学思想とデモクラシー思想とはルターの線—つまり「贖罪の神学」という観点—で解釈される傾向が強かったが、ニーバーのピューリタニズム観に照らして考えた場合、これまでのニーバー解釈は相当修正されなければならず、ニーバーの「冷静を求める祈り」（Serenity Prayer）に照らして言えば、「変えることの出来ないことを受け入れる冷静さ」よりも、「変えるべきことを変える勇氣」に軸足を置いたニーバー像を提示することこそが現代におけるニーバーの意義であることを述べて講演を締めくくられた。

氏の講演後には活発な質疑応答がなされ、その後の懇談では、ニーバー研究センターに対する祝辞や、会に参加できなかった先生方からのメッセージが紹介されたことも付記しておきたい。

（文責：豊川慎 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2009年10月3日、聖学院本部新館2階）